



一枚の写真が語る史実 ～もう一つの李参平墓碑～



李参平墓地改修落成式（青木家所蔵）

今年の企画展は「なつかしの有田 Part II」とし、約 1,000 枚の写真を展示しました。10月に第一会場とした有田町役場町民ロビーには多くの方に来場いただき、また、11月からは泉山の東館で開催しましたが、時期的にも周囲の紅葉が見ごろとなり、こちらにも多くの皆さまに来館いただきました。

この企画展の準備を進めていたところに、外尾山在住で当館運営協議会委員でもある陶芸家・青木清高さんが一冊のアルバムを持参されました。「こういう写真が家に残っているけれど…」と言って見せていただいた写真に驚きました。

それは現在も稗古場・報恩寺境内にある「李参平墓」の建立を祝う一枚でした。この写真の史実を物語る資料に、「有田町役場日誌」があり、その昭和 12 年 11 月 14 日付けに次のようにありました。

「午前十時より報恩寺境内に在る李参平墓地改修落成、墓前塔供養式に江越町長・林助役外有田警察署管内有志多数参拜、終わって有田劇場に於いて右墓地改修竣工に至るまでの経過を山田署長より詳細報告、来賓の祝辞ありて宴会に移り盛会なりき（有田警察署管内在住の鮮人組織の有田郷友会会長金宏水・副会長諸仲権其の他全員一同の自発的行為にて改修、本日の行事は郷友会主催なり）」

また、「松浦陶時報」の昭和 12 年 11 月 15 日号には、神近亨弉氏が次のような一文を寄せています。

「聞けば、この工事の総工費四百円で無名とまでは云い得なくとも兎に角有田署管内一町三ヶ村に住する百名に満つるか否かの此の少人数、然かも異郷に在って浸々営々粒々辛苦の結晶たる同会積立金の殆ど大半をこの改修に投じたに到っては、ただ感嘆の外はな

い。」

そのころ、有田周辺に住んでいた朝鮮半島出身者を中心に建立されたことはこれらの資料が証明し、また民俗衣装を身に付けた女性たちの姿も写真にあります。昭和 12 年当時は、白川にある初代金ヶ江三兵衛（李参平）の墓碑の存在は確認できず、「陶祖といっている割には墓もないのは如何なものか」という思いから、寄付を募っての建立となったようです。

ところが、有田とも深い関わりがある久米邦武が太政官修史館に勤務していたころ、同僚と毎月一回開催していた言志会の記録である「星岡史話」（東京大学史料編纂所データベース）の明治 18 年（1885）4 月 20 日付けに「金ヶ江氏家記」として次のように記録されています。

「李参平ノ墓ハ白川谷元代官所 今小学校 裏山ニアリ、金ヶ江祖月窓浄心居士 八月十一日 孝孫同名三兵衛立之」とあって、久米は明治期に初代金ヶ江三兵衛の墓碑を確認しています。つまり、明治のころには確認されていたものが、昭和初期にはすでに白川の金ヶ江三兵衛の墓碑の存在が町の中では忘れ去られてしまったこととなります。しかも明治のころの墓碑は完全な形であったようで、現在は解読できない部分も明記されています。

その後、昭和 34 年（1959）に郷土史家・智者礼一さんによって白川の共同墓地内に金ヶ江三兵衛（李参平）の墓碑が発見されました。ただ、なぜ 70 年ほどにわたり存在が忘れられてしまったかは不明ですが、有田村村長をつとめていた青木甚一郎（清高さん曾祖父）さんが写っている写真は、多くの史実を物語るものでした。（尾崎 葉子）

皿 季刊 山

No.104

冬

2014

有田町歴史民俗資料館・館報

泉山一丁目・中樽一丁目 遺跡の発掘調査

平成26年7月1日～10月31日の間、泉山一丁目遺跡及び中樽一丁目遺跡の発掘調査を実施しました。この調査は、県の街路整備（泉山・大谷線）に伴うもので、昨年度に引き続き2度目となります。今回も窯業関連の遺構をはじめ、磁器などの遺物もたくさん出土しました。



調査区全景（左：中樽一丁目遺跡 右：泉山一丁目遺跡）

〔遺跡の概要〕

中樽一丁目と泉山一丁目の両遺跡は、中央を隔てる小さな河川を境にして南北に接しています。しかし、土地の使われ方は大きく異なり、泉山一丁目遺跡の方が幕末から明治前期の間にはじめて窯業との関わりが認められるのに対し、中樽一丁目遺跡は17世紀中頃から連綿と磁器生産の工房として活用されています。

この付近で発見される工房跡は、“窯焼き”と称される業者のもので、製土から成形、登り窯による本焼きまでを担っていました。“窯焼き”は、江戸時代中期には180軒ほどもあったことが文献史料により知られますが、これまでの発見例は、昨年度の中樽一丁目遺跡の調査の1軒と、今回発見された2軒と過ぎません（館報102号でお知らせした町道部分の調査で発見された工房跡は、今回の工房跡の1軒と同じ屋敷地に当たります）。そのため、文献や絵画などの資料で断片的にはうかがい知ることができるものの、実際の工房の状況は、まだまだ謎が多いのが現状です。

中樽一丁目遺跡は、工房として利用されるように



地山面の遺構の検出状況（中樽一丁目遺跡）

なった当初は、出土製品から主に南側に近接する山小屋窯跡との密接な関係がうかがえます。また、山小屋窯跡が廃窯となる1640年代末～50年代初頭頃からは、おそらく西側に近接する中樽窯跡が利用されたと思われるのですが、残念ながら、現在のところ中樽窯跡が未調査であるため、詳しいことは分かりません。

〔発見された遺構〕

今回の調査では、中樽一丁目遺跡が“窯焼き”の工房跡、一方、泉山一丁目遺跡では、幕末～明治前期頃に築かれ、おそらく昭和の初期頃まで使用された、磁器土の水箆（すいひ）関連施設が特筆すべき遺構です。

中樽一丁目遺跡の工房跡では、陶石粉碎用の踏み臼跡と推測される穴（土窟）が複数見られましたが、これは昨年度の調査区及び町道部分の調査でも発見されています。すり鉢状に開く円形の穴の周囲に赤褐色の粘土を張っており、上から杵（きね）で突いても底面が沈まないように、底には平らな石が敷かれています。こうした臼が工房内に設けられていた事実は、これまで文献や絵画資料では知ることができませんでした。しかし、発見された3軒の工房跡すべてに残ることから、“窯焼き”に必須の常設の施設であった可能性が高くなりました。

そのほか、工房跡の1軒では、素焼き窯跡と推測される遺構も見つかりました。ちょうど登り窯の焼成室の一部を取り出したような形状で、室内も登り窯と同様に前部が薪を焚く火床、後部が製品を詰める砂床に分かれています。ただし、今回発見された窯跡は、砂床が削平されて残っておらず、かろうじて火床が残るだけでした。

一方、泉山一丁目遺跡では、水簸用の二つの升状の方形遺構とそれらを繋ぐ水路及び、そこに投入する粉碎した陶石の貯蔵施設、水簸によって生じた排土の廃棄場所など、水簸関連施設がまとまって発見されました。方形遺構は、当初は底面・側面ともに板材を組んで製作されていますが、途中で側板の上部に数段レンガを積んで、表面に薄くセメントを塗った状態で使用されました。こうした水簸施設については、「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」（有田陶磁美術館蔵）などに描かれたものが知られますが、今日の有田では現存しておらず、時期的に江戸時代の水簸施設の名残を留める最終的なスタイルの遺構と考えられます。

今回は紹介しきれませんでしたでしたが、このほかにも、たくさんの遺構が発見されています。しかし、特に“窯焼き”関連の遺構は類例が乏しいこともあり、なかなか用途までは特定できないのが現実です。県の街路整備事業に伴う泉山一丁目遺跡の調査は、今回で完了で

す。しかし、中樽一丁目遺跡については、来年度に再び別の敷地の調査を予定しており、類例が増えることによって、新たな事実が判明するかもしれません。

(村上 伸之)



文政 11 年（1828）の大火直後に構築された建物の基礎跡（中樽一丁目遺跡）



踏み白の白跡（中樽一丁目遺跡）



素焼き窯跡（中樽一丁目遺跡）



水簸施設の全景（泉山一丁目遺跡）



水簸用水槽の構築状況（泉山一丁目遺跡）



トンバイを組んだ方形遺跡（中樽一丁目遺跡）

企画展、開催しました

平成26年度企画展『なつかしの有田 Part II』を平成26年10月1日～10月20日（第一会場）、平成26年11月1日～11月30日（第二会場）と会期と会場を分けて開催しました。今回の企画展で展示する古写真を、町広報や館報、館ホームページなどで提供を呼びかけたところ、町内外の多くの方々に応じて頂きました。写真だけでなく古い映像資料も提供して下さい方もあり、これらの資料のお陰で企画展が開催出来たこと、改めて御礼申し上げます。

今回初の試みですが、有田町歴史民俗資料館東館だけで展示するのではなく、まず第一会場とした有田町庁舎町民ロビーで展示を行いました。というのも、旧西有田町の方々にとって泉山の資料館東館は少しばかり遠いため、泉山まで足を運んでいただくきっかけになれば、また、あまり遠くへ行けない高齢の方ができるだけ近場で写真を見られるようにしたいという思いから、この第一会場での展示を計画したのですが、たくさんのお声の声を頂き、続いて資料館東館にて開催された第二会場では、「第一会場も見たけど、第二会場も楽しみにしていました」「第一会場で知って初めて泉山まで来ました」という町民の方がたくさん来て下さいました。

第一会場の展示風景



さて、第二会場では約1,000枚の写真が皆さんを出迎えました。この1,000枚の写真はパソコンで複製し、若干の修正を加え再度プリントしたものです。他にも展示ケースの中に明治から昭和初期ごろの写真

の現物、古いカメラ、原版といった写真に関わる資料も展示しました。来館された皆さんは、壁面を埋め尽くす1,000枚の写真に圧倒されつつも、なつかしいふるさとの写真を見つけては歓声を上げ、中には友人・家族を連れて何度も見に来られる方もいました。

またエントランスホールでは「昭和31年 下内野浮立」「昭和28年 柿右衛門300年祭」（共に旧西有田教育委員会保管）、「忠右衛門・作」（昭和41年・NBC長崎放送制作・奥川家所蔵）、「日本発見シリーズ 佐賀県」（昭和36年・岩波映像制作）という4本の映像を放映しました。全部見ると1時間30分ほど時間がかかるにも関わらず、時を忘れて見入っている方もいらっしゃいました。

さらに、これもまた初の試みですが、今回の企画展は「参加型」の写真展にしたいと思い、会場内の各所に付箋を用意し、写っている人・物・場所を御存じの方、又は感想などを書いて写真に貼り付けてもらうようお願いしました。



第二会場の展示風景と写真に貼られた付箋

古写真は町の歴史を物語る貴重な資料ですが、それが持つ情報を読み取るには、写真が撮られた時代を知っている人やそのご家族などの、たくさんの方の協力が必要です。企画展の場をこの情報収集に活用したり、また見るだけでなく、一緒に楽しめる展示になるように考えたのですが、これもまた多くの情報・感想を記入して頂きました。

資料館ではまだまだ個人がお持ちの写真資料を募集しています。また、写真資料の情報も引き続き必要としています。今回の写真展を見て、「家にもあった」と思われた方はぜひ資料館にご連絡ください。

（永井 都）

夜間開館と紅葉ライトアップ



平成26年11月22日・23日の両日、恒例の夜間開館・紅葉ライトアップを行いました。来場者はライトに照らされた紅葉と足元に灯った碗灯の光を楽しみつつ、石場と資料館を散策されました。

季刊『皿山』

通巻104号（平成26年12月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185
URL : <http://rekishi.town.arita.saga.jp>